「日露戦争と情報」メモ（金子堅太郎 高橋是清 福島安正 石光真清 明石元二郎）

●日露戦争は情報の勝利、太平洋戦争は情報敗戦

▽日露戦争で 元老や 政府 軍の指導者は
　共通の情報を基に 真剣に論議
　そこから組み立てた政略 戦略に 最高の人材

▽太平洋戦争では 情報が どこかで止まって
　最高首脳の総合判断に 全く 生かされない
　現実認識が 極めて自己本位
　何でも都合よく解釈し 希望的観測で戦った

若槻礼次郎は回顧録に書いている

アメリカから「ハル・ノート」を突き付けられ昭和16年11月29日、重臣会議が開かれた。東条英機首相は内容を仔細に検討して重臣に意見を求めるのではなく、「開戦は当然」との説明。若槻が「戦争半ばに石油が不足したら、どうして戦争を遂行出来るか」と質問すると、東条は「石油は決して不足しない、心配に及ばない」。若槻にも蘭印の油田地帯を占領する意図だとはわかったが、捕らぬ狸の皮算用と思い、続いて開かれた御前会議でも「憂慮に堪えない」と述べたところ、東条は「陸軍では十分調査し戦争資材には不足ないという公算を得ている。ただ若槻にこれを諒解させるには、三、四時間の時間が必要です」と質問を遮る始末。

開戦後も毎月1回重臣を招いて東条が戦況報告をしたが、新聞に出ているものと同じ。石油はどうか聞くと、企画院総裁鈴木貞一は「日本国民に愛国心のある以上必ず出来る」。忠義な国民がおりさえすれば何でも出来るような、「実に奇妙な答弁をする人」と書いている。

▽精神主義こそ 東条の 戦争指導の基本理念

▽嶋田繁太郎（海相）は 天皇が心配しないよう
　いつも「油は十分ある」と 作文した資料作成

▽代わった小磯国昭内閣 閣議で
　藤原銀次郎（軍需相）が 船舶・石炭の悪化を説明
　重光葵（外相）「こうした状態を、なぜ早く我々に伝えなかったのか」

▽きちんとした情報が流れず 情報音痴の中の戦争

若槻　礼次郎（わかつき・れいじろう）

慶応2（1866）～昭和24（1949） 松江藩出身。蔵相、内相を経て大正15年首相。昭和6年再び首相となるも、満州事変収拾に失敗し辞職。著に「古風庵回顧録」

ハル・ノート

日米交渉中の昭和16年11月26日、ハル米国務長官の提案。中国・仏印からの日本軍の全面撤兵、中国では蒋介石政権以外のいかなる政権をも認めない、などの内容で、日本側は米国の最後通告とみなし、開戦を決定した。

東条　英機（とうじょう・ひでき）

明治17（1884）～昭和23（1948）東京生まれ。陸軍大将。近衛内閣陸相を経て昭和16年10月首相。陸相の他一時は内相、軍需相、参謀総長を兼務したが19年7月サイパン陥落で辞職。戦後、拳銃自決を図るも未遂に終わり、東京裁判で絞首刑

鈴木　貞一（すずき・ていいち）

明治21（1888）～平成1（1989） 千葉県生まれ。陸軍中将。昭和16年近衛内閣企画院総裁。東条内閣にも留任、戦争経済企画の中心。A級戦犯で終身刑、31年釈放

嶋田　繁太郎（しまだ・しげたろう）

明治16（1883）～昭和51（1976）東京生まれ。海軍大将。昭和16年東条内閣海相。19年軍令部総長を兼務「東条の副官」と言われた。A級戦犯で終身刑、30年釈放

小磯　国昭（こいそ・くにあき）

明治13（1880）～昭和25（1950）山形県生まれ。陸軍大将。軍務局長、陸軍次官、拓相、朝鮮総督を歴任、昭和19年7月首相。A級戦犯で終身刑。服役中に病死

「メモ魔」の東条

部下の報告をいちいち手帳に書き留め、軍服にはいつも2冊の手帳を入れていた。一つは毎日の記録、もう一つは1週間分を整理した記録で、目前の事務処理能力には優れていた。ただ総合判断、長期的視野に乏しく、専ら関心を示したのは政敵に関する憲兵情報。異なる意見を受け入れる雅量がないから周りにはご機嫌取りの連中が集まった。内大臣木戸幸一は「あれは事務屋で政治家じゃないんだよ」

●日露戦争の情報を支えた日英同盟（明治35年1月締結）

▽アーネスト・サトウは 幕府 薩長の間を出入り
　維新のリーダーの ほとんどに 会っている
　西郷隆盛に会って「革命をやるなら今だ。
　　うっかりすると出来なくなる」

▽イギリスは 情報の量と質の高さで 群を抜く
　大英帝国を築き上げたのも この情報力

▽イギリスから 国際情勢の動きを 刻々教えて貰い
　明治日本の弱点 目と耳の部分を補った

▽ロンドン・タイムズ ロイター通信
　マスコミという情報伝達手段 口の部分も

タイムズ、ロイターの強さ

大英帝国と共に発展し取材網を広げて来た。ロイターは明治4年には横浜、長崎に支局を開設。福沢諭吉の時事新報（15年3月創刊）が明治の知識人に人気があったのも、26年ロイターと独占契約を結び、海外ニュースを掲載したから。

タイムズ、ロイターの強さは自他共に認めるところで、「タイムズ、ロイターが知ることは、世界中が知ることだ」と言われた。だからタイムズ、ロイターが日露戦争をどう判定し、どう報道するかは重大な意味を持っていた。

●明治３７年２月３日、「旅順のロシア艦隊が出港し行き先不明」の緊急電報が入って来た

▽４日午前の閣議は
　日露交渉中止 国交断絶 軍事行動開始を決定

藤原　銀次郎（ふじわら・ぎんじろう）
明治2（1869）～昭和35（1960） 長野県生まれ。大正9年王子製紙社長となり商工相を経て、昭和19年小磯内閣軍需相。13年に藤原工大（現慶大工学部）を開校

重光　葵（しげみつ・まもる）
明治20（1887）～昭和32（1957）大分県生まれ。外務次官、駐ソ・駐英大使歴任。昭和18年東条内閣外相、小磯内閣に留任。東京裁判で禁固7年。29年鳩山内閣外相となり日ソ国交回復、国連加盟を実現

木戸　幸一（きど・こういち）
明治22（1889）～昭和52（1977）東京生まれ。文相、厚相を経て昭和15年内大臣となり、東条を首相に推薦。戦争末期は終戦に尽力した。東京裁判で終身禁固刑、30年仮出所。著に「木戸幸一日記」

アーネスト・サトウ（Ernest Satow）
1843～1929 文久2年来日し英国横浜領事館通訳。オールコック、パークス公使の下で英国の対日政策を反幕派支持に転換さす。明治28年日本公使、33年清国公使。著に「一外交官の見た明治維新」

西郷　隆盛（さいごう・たかもり）
文政10（1827）～明治10（1877）薩摩藩出身。号を南州。藩論を尊皇討幕へ転換させ、戊辰戦争参謀として全軍を指揮。新政府参議となり、征韓論を主張し下野。不平士族に推され西南戦争を起こして敗れ、城山で自尽。明治22年正三位追贈

サトウの本は禁書扱い

「一外交官の見た明治維新」（大正10年ロンドンで出版）は、維新の偉業が権威を憚らぬ外国人の自由な観察で害なわれるのを嫌ったのか、敗戦まで25年間も禁書扱い。

サトウが日本に惹かれたのは、兄が図書館から借りて来た絵草紙風の本だっ

▽午後から御前会議 伊藤博文が議長となり
問題点の一つ一つに 駄目押しの質問を重ねた
曽禰荒助蔵相には「戦争が長引いても続けるだけの経済力があるのか」深刻な質問が集中

政府予測の日露戦費

4億5千万円、そのうち兵器購入など海外支払いに充てる分を1億5千万円と見積もった。日清戦争は2億2千万円かかったから、戦争期間1年として2倍を見た。日銀の正貨(海外支払いに使う金貨)は1億1千7百万円しかなく、輸入決済の分を差し引くと正味5千2百万円で、1億円不足する。

▽曽禰は何度か立往生 松方正義が助け船を出し
やっと「開戦やむなし」の結論 伊藤は上奏した
「準備は万全とは申しがたい状態ではありますが、事ここに至りましては、一に陛下の親裁を仰ぎ、臣等一同、万民と共に御稜威に頼りて皇国を死守するほかないと存じます」

明治天皇はロシアとの戦争を心配

「ロシア皇帝に親電を送って打開の道を開きたい」と言われたが、桂太郎首相は「形勢すでに逼迫し、その余裕なきものと考えます」と言上、御前会議は対露開戦を決定し散会した。天皇はその夜、側近に「今回の戦は朕が志にあらず。然れども事すでに茲に至る。之を如何ともすべらざるなり」。そして「事、万一蹉跌を生ぜば、朕何を以てか祖宗に謝し、臣民に対するを得ん」と声を詰まらせ、「明治天皇紀」は「忽ち涙潺々(せんせん=水がさらさら流れる様子)として下る。一座為に黯然たり」と記録している。

2月10日の宣戦の詔書に御璽を捺される時も手が震えて、なかなか捺せない。山本権兵衛(海相)が天皇の右手をしっかり押さえ、やっと捺されたという話が残っている。

●元老たちは素早く行動を起こした
▽2月24日 2人の要人が アメリカへ船出
金子堅太郎(貴族院議員)と 高橋是清(日銀副総裁)
▽伊藤は4日夜 金子を 枢密院議長官舎に呼んだ

た。「空がいつも青く、太陽が絶え間なく輝いている。バラ色の唇と黒い瞳の、しとやかな乙女たちにかしづかれることだけが男の勤めであると言ったような、この世ながらのお伽の国。天の恵んだ、この幸福な島国をおとずれる機会がやって来ようとは、夢にも思わなかった」。日本へ行く通訳生募集を知って受験、文久2年19歳の時に日本へ。

英国の外交官は任地が決まると、その国の言葉を徹底してやらせるのが伝統になっている。サトウは、日本人顔負けの達者な日本語を話し候文の手紙も書いている。幕府の公式文書が御家流で、これが読めないとわからないことが多いと、書道の先生について習った。

千鳥が淵の桜は、明治28年に日本公使になったサトウが尽力して植えたもので、昭和の初め、日本の英字新聞が紹介した際に、「故サトウ」と書いた。サトウは昭和4年86歳まで長生きするが、その新聞をわざわざ取り寄せて日記に貼り付け、脇に「ｎｏｔ ｙｅｔ」(まだだぞ)と書き入れたという。

福沢 諭吉(ふくざわ・ゆきち)
天保5(1834)～明治34(1901) 中津藩出身。慶応義塾(明治1年)時事新報(15年)の創設者。著に「西洋事情」「学問のすゝめ」

伊藤 博文(いとう・ひろぶみ)
天保12(1841)～明治42(1909)山口県周防の百姓の子として生まれ萩の足軽の養子に。尊皇攘夷運動に参加し文久3年イギリスに密航。維新後は参議となり、内閣制度、憲法制定、枢密院設置など国家体制整備に尽力。明治18年初代首相。4次の内閣を組織、3度枢密院議長。33年立憲政友会総裁。38年韓国統監。ハルビンで安重根(韓国独立運動家)に暗殺される

▽「世界の列強を見るに、日本の同盟国はイギリスだけだ。フランスはロシアと同盟しておりドイツも中立とはいえロシア寄りだ。ただ一つ頼むのはアメリカだ。アメリカ世論が日本に同情するようアメリカへ行って有利に導いてほしい」

金子とルーズベルト大統領の仲

金子は明治4年福岡藩留学生として岩倉使節団と共に渡米、そのまま8年間もアメリカに残って、ハーバード大を卒業したアメリカ通。セオドア・ルーズベルト（1858～1919 第26代米大統領）とは、22年に議会制度調査のため渡米した時、日本美術愛好家に紹介されハーバード同窓ということで意気投合、「テディ」、「ケン」と呼び合うほど親しい仲になった。

元老たちはロシアと戦うにしても短期決戦、潮時を見て講和に持ち込まないと国力の弱い日本が負けることをしっていた。問題は、どの国に講和を斡旋して貰うか。米国以外になく、ルーズベルトに動いて貰う狙いだった。

▽金子は「アメリカは国民感情からしてロシア寄りの国だ」「とても無理だ」と断った

▽伊藤は「もしロシア軍が九州に上陸して来たら、自分は一兵卒として銃を執って戦う積もりだ。君も最初から成功しようと思うのではなく、国家のために身を投げ出す積もりで、やれるだけやってくれ」最後は 熱意に動かされ承諾した

●金子は、その足で児玉源太郎参謀次長を訪ねた

▽児玉は「実をいうと勝つ見込みは立たんのじゃ」「この三十日間、わしはこの部屋に泊まり込み夜は軍服のまま赤ゲットをかぶって寝ているが、どうやったら、勝負を五分五分まで持っていけるかどうか。だが五分五分では勝負はつかん。せめて六分四分にしようと、今苦心しているところだ」そして「最初の戦いは、北朝鮮のロシア軍を鴨緑江以北に駆逐することだ。とにかくロシア軍の三倍の兵力をぶつけて、絶対に勝つ積もりだ。これが成功すれば、勢いに乗って、あるいは六分四分まで持っていけるかも知れん」

曽禰　荒助（そね・あらすけ）
嘉永2（1849）～明治43（1910）長州藩出身。明治25年衆院選挙に当選し副議長。法相、内相を経て34年桂内閣蔵相。42年韓国統監となり韓国併合を推進した

松方　正義（まつかた・まさよし）
天保6（1835）～大正13（1924）薩摩藩出身。明治14年から16年間大蔵卿・蔵相を務め、日銀創設、兌換銀行条令制定など財政の基礎を作る。24年、29年首相

桂　太郎（かつら・たろう）
弘化4（1847）～大正2（1913）長州藩出身。陸軍大将。陸相を経て明治34年首相に就任、日英同盟を締結、日露戦争を遂行した。41年再び首相となり韓国併合。内大臣兼侍従長を経て大正1年3度首相となるも、大正政変で2か月で辞職

山本　権兵衛（やまもと・ごんべえ）
嘉永5（1852）～昭和8（1933）薩摩藩出身。海軍大将。明治31年山県内閣海相となり「六六艦隊」を整備。大正2年首相に就任、軍部大臣現役制を撤廃。12年再び首相となるも「虎ノ門事件」で辞職

金子　堅太郎（かねこ・けんたろう）
嘉永6（1853）～昭和17（1942）福岡藩出身。伊藤の下で憲法起草に携わり、農商務相、法相。日露開戦で渡米し講和斡旋工作に奔走。明治39年から枢密顧問官

高橋　是清（たかはし・これきよ）
安政1（1854）～昭和11（1936）江戸生まれ。日銀副総裁の日露戦争中、外債募集に成功。日銀総裁、蔵相を歴任し大正10年首相。昭和2年田中内閣蔵相となり金融恐慌を収拾、満州事変後、犬養・斎藤・岡田内閣蔵相として世界恐慌の危機を乗り切る。二・二六事件で暗殺される

▽児玉は「だから、五度は勝っても、五度は負けたの電報を受け取る積もりでいてほしい。とにかく、緒戦に全力をあげる」

▽山本海相も「日本の軍艦は半分は沈める。その代わり、ロシアの軍艦は全滅させる」

▽翌朝 美子皇后(のちの昭憲皇太后)が 金子の自宅を訪ね「よろしく頼みます」と 声をかけられた

児玉は開戦4か月前に参謀次長に

明治36年10月、対露戦指導の中心だった田村怡与造参謀次長が急死、陸軍は色を失った。後任は衆目の一致するところ、児玉しかいないが、児玉は台湾総督、陸相、内相を歴任、2階級下がるようなもの。しかし国家の大事に引き受け、井口省吾少将(参謀本部総務部長)は日記に、「児玉男爵内務大臣ヲ去ツテ参謀本部次長ノ職ニ就カルルニ会ス。以テ、天ノ未ダ我帝国ヲ棄テザルヲ知ル。何等ノ喜悦、何等ノ快事ゾ。陸軍中、少将ノ中ニ求メテ、適任コノ人ノ右ニ出ヅル人ハアラジ」

●児玉は、鴨緑江突破の黒木為楨大将の第1軍に4万2千5百、野戦重砲兵連隊(12㌢榴弾砲20門)を配備

▽ロシア軍は2万 九連城配備は薄く
日本軍は兵力で5倍 砲兵で3倍の優勢

▽5月1日朝の総攻撃で ロシア軍は戦死3千
大砲21門を失い退却 日本軍の死傷923

▽児玉は「九連城占領」の報告を受け 男泣きした

タイムズはこう書いた

「日本軍がロシア軍の敵になり得るかどうかは世界中の軍人が持っていた疑問だが、今やその疑問はなくなった。日本軍の士気と勇気と組織力、鴨緑江の戦いは称賛すべき戦いだった」

▽最大級の賛辞は 日本陸軍に自信
金子の世論工作にも 大きな援軍に

▽小村寿太郎外相は 金子に「黄禍論」を注意

▽アメリカの空気は はるかに ロシア寄り
「yellow little monkey」
「この戦争は、白色人種に対する黄色人種の戦争だ」と 書いている新聞もあった

児玉 源太郎(こだま・げんたろう)
嘉永5(1852)～明治39(1906) 周防徳山藩出身。陸軍大将。明治20年陸大校長となりドイツ軍制・戦術の導入に努め、陸軍次官を経て台湾総督。33年陸相就任、桂内閣で内相。36年10月、参謀次長となり、日露戦争では満州軍総参謀長。39年参謀総長に就任したが在任中急死

昭憲皇太后(しょうけん・こうたいごう) 美子(はるこ)
嘉永2(1849)～大正3(1914) 京都生まれ。明治天皇の皇后。左大臣一条忠香の三女。女子教育振興、博愛社(日赤)など社会事業に尽くされ和歌3万6千首を残す

田村 怡与造(たむら・いよぞう)
安政1(1854)～明治36(1903) 山梨県生まれ。陸軍少将。ドイツに留学し明治30年参謀本部勤務。総務部長を経て、参謀次長となり対露戦の指導に当たる

井口 省吾(いぐち・しょうご)
安政2(1855)～大正14(1925) 静岡県生まれ。陸軍大将。ドイツに留学し日露開戦時の参謀本部総務部長。開戦後、満州軍参謀となり、のち軍事参議官

黒木 為楨(くろき・ためもと)
弘化1(1844)～大正12(1923) 薩摩藩出身。陸軍大将。日清戦争で第6師団長、日露戦争では第1軍司令官として、鴨緑江から奉天に連戦。陸軍が長州閥全盛期、元帥に昇れず大正5年枢密顧問官

小村 寿太郎(こむら・じゅたろう)
安政2(1855)～明治44(1911) 宮崎県飫肥(おび)藩出身。文部省留学生としてハーバード大に学び外務次官、駐露・駐清公使を歴任、明治34年桂内閣外相。ポーツマス講和会議全権。41年再び外相、韓国併合と関税自主権回復を行なう

●頼みは、やはりルーズベルト大統領

▽金子が３月末 訪ねると「自分は政治家として、ロシア皇帝による専制政治を好もしく思っていない。アメリカ政府上層部も、一様に日本に好意を持っていることを知っておいてほしい」

▽６月６日 ルーズベルトは こう切り出した
「ロシアも戦争の終結を考えなければならない時が来ると思う。その時は、自分が講和の斡旋に尽力したいと考えている」

▽開戦と同時に終戦の布石 ― 伊藤 小村の周到さ

●高橋是清は、戦費調達のための外債募集

▽曽禰蔵相は「到底自分の任でない」と 辞意表明
明治天皇の「助けてやれ」のお声がかりで
松方と井上馨が 全面的に バックアップ

高橋が井上に認められたのは…

特許局の初代局長になった明治20年、独立の庁舎を建てようとコンドルに設計させたところ、予算より4万円も多い12万円。農商務相の井上から「こんなに大きなものを建てて、一体何年これをやる見込みか」「まず今後二十年です。二十年経って、これでは狭いというようにならねば日本発明界の進歩は覚束ないと思います。東京見物に来た者が、浅草の観音様の次には、特許局を見に行こう、というくらいにしたいと思います」。井上も大笑いしてＯＫしたが、築地のハイカラな煉瓦建て庁舎は、関東大震災で焼失するまで東京の観光名所に。

横浜正金銀行副頭取の31年、欧米へ出張した際、蔵相の井上から「外債を起こすのにどんな条件なら可能か、瀬踏みしてほしい」との密命を受け、外債の下調べもしていた。

▽開戦２日後の１２日夜 井上に呼ばれ「ロンドンに行って外債募集に当たって貰いたい」

▽高橋は注文をつけた 外債の話が起こると
内外のブローカーが 政府に働き掛けてくる
「政府が迷うようでは仕事の支障になります。政府に一切取り上げない決心がなければ、この大任を引き受けることは出来ません」

黄禍論(yellow perill)

日清戦争の際、独皇帝ウィルヘルム二世が唱えた「黄色人種の進出によって、白色人種に災禍が加えられるだろう」という、人種主義的な感情論。

井上　馨(いのうえ・かおる)

天保6(1835)～大正4(1915)　長州藩出身。維新後、大蔵大輔。参議兼外務卿、伊藤内閣外相として条約改正交渉に当たる。内相、蔵相を歴任して三井の最高顧問を務め、財界の大御所渋沢栄一も、井上の前では「御前様」といった感じで畏まるほど、財界に重きを成した

渋沢　栄一(しぶさわ・えいいち)

天保11(1840)～昭和6(1931)　埼玉県の豪農の出。第1国立銀行、王子製紙、東京瓦斯を設立、手形交換所、商工会議所を組織し、「財界の大御所」に

子だくさんの松方

13男6女。最後の子が生まれた時、松方69歳、夫人59歳。明治天皇から「子供は何人か」と聞かれ、指折り数えてもわからず、「後刻調査のうえお答えします」と答えたという伝説がある。ライシャワー(1910～1990 元駐日大使)夫人のハルさんは松方の孫。

コンドル(Joseph Conder)

1852～1920 英建築学者。明治9年、工部大学校教授として来日、帝室博物館、鹿鳴館、東大法学部講堂、ニコライ聖堂など、日本の洋風建築に多大な業績

高橋の出した「出張員の注文」

一、政府は十分なる委任条件を定め相当権限を賦与すること

二、政府は林公使(駐)に訓令して、出張員の外交上、公私共その目的に向って十分の援助を与えしむること

三、政府は前項の場合を除き出張員

▽井上も堅く約束 関係機関に 厳守を命じた
▽壮行会で 挨拶に立った井上は「もし外債募集がうまくゆかず、戦費が整わなかったらどうなるか。高橋がそれをやってくれねば日本は潰れる」

●政府から命じられた外債募集額は１億円
▽高橋は 一切の雑音を シャットアウトし
同時に 全責任を負って まずアメリカへ
▽アメリカ自体が 産業振興の真っ只中
外資導入に懸命の時 とても見込みがないと
３月初め ロンドンに渡った
▽日英同盟による親日気分と お金の世界は別
「日本が負けるだろう」の声が 圧倒的
戦前の日本公債は 暴落に暴落を重ねていた
▽銀行筋に当たっても「ロシアには担保になる土地も鉱山もあるが、日本にはない。日本に金を貸すのは投資ではなく、投機だ」
▽ただ 幸いなことに シャンドが
パース銀行ロンドン支店長をしていて
親身になって 奔走してくれた
▽４月１０日頃 イギリス銀行団が条件を提示
高利・短期 植民地的な条件だったが
高橋も粘って
・発行額を 政府希望１千万ポンドの半額
５百万ポンドに
・期限を７ケ年 発行価格も９３．５ポンドに

●仮契約の運びになり、残り(5百万ポンド)をどうするか

思い悩んでいるところへ…

高橋に言わせると「偶然のことから一つの仕合せなことが起こった」。日本に来た時の友人ヒルが「とにかくよかった」と慰労の晩餐に招待してくれ、そこで紹介されたのがヤコブ・シフというアメリカ人だった。

フランクフルト生まれのドイツ系ユダヤ人。ニューヨークの有力なユダヤ系金融機関であるクーン・レープ商会の首席代表で、在米ユダヤ人協会会長。ヨーロッパ旅行の帰り、ロンドンに着いたところをヒルが高橋と一緒に招待した。食卓に着くと隣に座ったのがシフ。食事のほか他に外債の用向を間接直接申付けざること

四、政府は外債に関し内地において外国人より申込あるも一切取合わぬこと

五、政府は横浜正金銀行、日本興業銀行の当事者に内命し、外国人より公債の世話等申込む者あるも一切取合わざしむること

シャンド(Alexander Shand)
1844～1930 イギリスの銀行家。幕末にマーカンタイル銀行横浜支店の支配人として来日。明治5年に政府から国立銀行経営指導者として雇われ、銀行簿記、金融業務などを指導。10年に帰国、日露戦争当時はパース銀行ロンドン支店長

イギリス銀行団の条件

発行公債はポンド公債とする、関税収入を以て抵当とする、利子は年6分で期限5ケ年、発行価格92ポンドで発行額の最高限度は300万ポンド。

シフの真意は…

経済人である以上、当然損得の計算はしたろうが、ロシアにいる5百万人のユダヤ人を助けたい ― この気持ちが強かった。

帝政ロシアの歴史は、ユダヤ人虐殺と迫害の歴史だった。役人への採用はもちろん、国内の自由な旅行も出来ない。ロシア正教への改宗を迫り、言うことをきかないと殺してしまう。明治14年、アレクサンドル二世の暗殺にユダヤ人が関わっていたことから迫害はひどくなった。

シフは迫害をやめることを条件に、何度かロシア政府に金を貸したが、温和しくしているのは借りた当座だけ、1年も経たないうちにまた始まる。絶望したシフは、この戦争に日本が勝てば、ロ

中も、しきりに日本の経済の状態、開戦後の様子などを質問してくる。高橋も丁寧に応対し、外債も5百万ポンドで合意した経緯を話した。

▽翌日 シャンドが シフの使者として来て
「シフが残額五百万ポンドを全額引き受け、アメリカで発行したいとの希望を持っているが、どうか」 高橋は「一に天祐なり」と喜んだ
▽話が纏まり ロンドン ニューヨークで
５月１１日に １千万ポンド公債を 同時募集
▽最初 １億円の予定だった外債は
戦備が膨れ上がり 戦争中４回 戦後も２回
計１億３千万ポンド １３億円も発行される

英貨公債	募集期間	年利 %	発行価格 ポンド	償還期限	発行額 千ポンド
①	37年 5月	6	93.5	3年据置後 4年	10,000
②	37年11月	6	90.5	3年据置後 4年	12,000
③	38年 3月	4.5	90	5年据置後15年	30,000
④	38年 7月	4.5	90	5年据置後15年	30,000
⑤	38年11月	4	90	15年据置後10年	25,000
⑥	40年 3月	5	99.5	15年据置後25年	23,000

▽シフは その都度 必ず 半額ずつ引き受けた
▽日露戦争は ユダヤ資本と 帝政ロシアとの戦い
太平洋戦争は ドイツと同盟したため
ユダヤ・コネクションを 敵に回すことに
▽５月１１日 第１回公債発売に
ロンドンも ニューヨークも 行列の人気
▽「鴨緑江の日本軍勝利」の報道で
応募申し込みが発行額の数倍 午後３時締切る

●戦争はやはり「金食い虫」だった
▽戦費は 予測の４倍以上 １９億５千万円に

シアに一大変革が起こりユダヤ人も圧政から救われるだろう ― そう思って巨額の外債を引き受けたのだ。

日本にとっては命の恩人

日本政府はシフに勲2等瑞宝章、勲2等旭日章を贈り、明治39年に来日した時には、明治天皇が特に午餐会に招待し、テーブル・スピーチも許されるという破格の待遇をしている。

高橋も、外貨支払いに当たる横浜正金銀行の取引をクーン・レーブ商会とさせるようにした。大蔵省財務官も密接な連絡をとるようになった。若槻元首相も政府財政委員として出張した際、シフを訪ねている。

このクーン・レーブ商会との関係が日米開戦直前、日米間の橋渡し役をすることになる。昭和15年11月2人のアメリカ人神父が商会役員の紹介状を持って来日、若槻らを訪ねて来たことから、日米交渉はまず民間人同士の話し合いから始まった。

公債発行条件も有利に

日露両軍は8月末遼陽で正面衝突、9月4日に占領する。しかし死傷者の数だけ見れば、日本軍2万3千、ロシア軍1万8千で日本の方が5千人も多い。ロシアは最初から日本軍を満州の奥深く引きずり込み、補給路の延び切ったところを叩く作戦だったから、勝敗の判定は微妙なところだった。

ところがタイムズもロイターも、日本軍が前進したということで、「日本が勝ってロシアが負けた」と報道、これが大きかった。38年3月、7月の募集では年利4.5%、償還期限も20年になった。

▽戦争中 高橋１人で８億２千万円(戦費の42%)
▽この金なしには 戦争は 半年も続けられなかった
▽開戦４か月も経たないうちに 前線からは
「砲弾送れ」陸軍省の返事は「偏に節約を乞う」
▽陸軍は９月中旬 遼陽の戦いが終わると
クルップ アームストロングなど
世界中の兵器会社に 砲弾４５万発を注文

●「平成の高橋是清出でよ」
▽信念と気概の 持ち主だった

深井英五(高橋の秘書役)は回想している

シフの半額引き受けの話し合いがつくと、シャンドやって来て、「シフが近々米国へ帰ることになったので、その前にあなたにお目にかかっておきたいと言っている」。高橋が「それはどういうことか。自分の方からシフを訪問したらよかろうかということか」と聞き返すと、シャンドが「まあそうだ」。高橋はキッとなって「なるほどシフは偉い人で、今度の功績については自分も敬意を表し、かつ感謝している。しかし自分は今、一国を代表して来ているものである。自分に会いたければ、向こうから訪ねて来ればいいじゃないか」

間もなくシャンドがシフを同道して来たが、高橋の宿は馬喰町の商人宿といった、三、四流のホテル。さっそく答礼にシフを訪ねると、こっちは各国の皇族、貴族、大富豪が泊まる超一流ホテル。高橋は深井に「シフの宿は宮殿のようだ。我々も宿を替えねばならぬナア」

●波瀾万丈の転職人生
▽上は 総理大臣 大蔵大臣 日銀総裁から
役人や 学校の先生もやったし
下は 芸者の三味線を担ぐ「箱屋」
アメリカでは 奴隷も経験している
▽高橋の 気概 信念は
この 浮き沈みの人生の中で 培われた

「ダルマさん」の愛称

「坂の上の雲」の主人公、秋山真之と正岡子規

物量音痴の陸軍の体質

開戦に当たり大砲1門に必要な砲弾量を1か月50発と予測。日清戦争の経験から弾き出した数字で、激戦になれば1日で使ってしまう量だった。

太平洋戦争の時も、海原治(防衛庁官房長、国防会議事務局長)が、陸軍主計将校の体験を基に書いた「戦史に学ぶ」によると、1会戦に用意した弾丸は軽機関銃が8千発、重機関銃1万3千発。機関銃は1分間に500発発射するから、軽で16分、重も46分の射撃で全弾終了。それさえなくて、大体半分の量しか用意出来なかったという。

深井　英五(ふかい・えいご)
明治4(1871)～昭和20(1945) 群馬県生まれ。国民新聞外報部長、松方蔵相秘書官を経て日銀に入り、昭和10年総裁。13年枢密顧問官となり「枢密院覚書」を残す。著に「回顧七十年」

高橋の言葉

娘婿の岡千里(三井銀行勤務)が「是清翁との対話」を残している。「軍備、軍拡と云うものが何を意味するのだ。この背後にある国民の経済力を問題にしないで何万人兵隊を並べて見た処で一体それが何になる」(昭和6年8月)

「近衛文麿も立派な人だらう。然し世の中の人々が彼を利用するのだ。近衛を総理にして自分も大臣にならうとする策士が彼をかつぐのだよ。あれで外国にでも行って見ればもう少し人物が出来やう」(昭和9年4月)

近衛　文麿(このえ・ふみまろ)
明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。公爵。昭和15年に首相となり直後の支那事変収拾に失敗。15年第2次内閣で日独伊三国同盟締結。第3次内閣で日米交渉に努めるも失敗し総辞職。戦後、戦犯に指名され服毒自殺

は、高橋から英語を教わっている。大学予備門（東大の予科）を受験しようと神田の共立学校（現開成高校）に入ると、英語の教え方のうまい、真ん丸い顔の英語教師がいた。子規の言った「まるでダルマさんじゃな」が、高橋の終生のあだ名に。

人間の運命

幕府御用絵師・川村庄右衛門の私生児として生まれ、川村には6人の子供がいたため生後すぐ仙台藩江戸在勤の足軽高橋是忠の家に里子として出された。2歳の頃三田の大きな菓子屋から養子にほしいとの話があり、祖母になる喜代子が「二年も育てたこの可愛い子を、武士ならともかく、町人へやるのは可哀相だ」と、是忠の実子として藩に届け出た。高橋は自伝に書いている。

「人間の運命というものは実に妙なものだ。もしこの場合、私が菓子屋の養子になっていたら、あるいは一生菓子屋で終ったかも知れぬ。少なくとも今とは全然異なった立場にあったに相違ない。人の一生は実に間髪の間に決るものだ」

●シャンドと知り合い、外債募集成功の原動力に

紳士で誠実なシャンド

慶応2年、13歳の時にヘボンが一時帰国、横浜で銀行支配人をしていたシャンドにボーイとして雇われた。馬丁やコックと酒を飲む、博打を打つ。酒の肴に鼠を捕まえ、シャンドの肉焼き器で焼いたところ、シャンドから「それだけはしないで下さい」と穏やかに注意され、自伝に「あの時だけは恥入った」と書いている。

明治31年、外債の下調べにロンドンへ行った時も、丁寧に教えてくれたうえ、有力な財界人にも紹介してくれた。横浜時代のことを詫びようとすると、すぐ話題をそらし、高橋に恥をかかせないようにしたという。

▽慶応３年 仙台藩留学生としてカリフォルニアへ
　一列ボタンのフロックコートに 婦人用の古靴
▽世話した武器商人（ヴァンリード）が 奴隷に売り飛ばす

秋山　真之（あきやま・さねゆき）
明治1（1868）～大正7（1918）　松山市生まれ。海軍中将。好古陸軍大将の弟。明治30年米国留学、海軍切っての戦術家。日本海海戦で連合艦隊参謀としてバルチック艦隊を破る。軍務局長の時、急死

正岡　子規（まさおか・しき）本名 常規（つねのり）
慶応3（1867）～明治35（1902）松山市生まれ。俳人。近代俳句に多くの業績を残し、カリエスによる病床生活の中で「墨汁一滴」「病牀一尺」などの随筆を残す

津島　寿一（つしま・じゅいち）
明治21（1888）～昭和42（1967）香川県生まれ。岡田内閣高橋蔵相の下で次官。日銀副総裁を経て小磯内閣蔵相。戦後、昭和28年参院議員。岸内閣防衛庁長官

喜代子の愛情と凛とした姿勢

津島寿一は「高橋是清翁のこと」に、「特に深く印象づけられた点は恬淡、無欲、邪気のないこと、物事にあまりこだわらず楽天的であったこと、そして公的生活においては、国家公事に奉ずる信念に燃え、その出処進退を理と義に調合したことなど看のがしてはならぬ点であろう」

高橋の人間形成に、大きな影響を与えたのが喜代子。高橋が10歳の時、仙台藩江戸留守居役大童信大夫（おおわら・しんだゆう）が「これからは外国の事情を知らねば」と、藩の子弟から鈴木六之助（のち知雄、日銀出納局長）と共に選ばれ、横浜の居留地で宣教師ヘボンに英語を習うことになった。喜代子は「こんな物騒な時に子供を一人で横浜へ出すのは忍びない」と藩にかけあい、急拵えの家を1軒建てて貰い、一緒に住んで2人の食事、身の回りを世話した。

高橋が渡米する時も短刀を渡して、「これは祖母が心からの餞別です。こ

「高橋是清自伝」(中公文庫)の面白さ

登場人物が実に多彩で、幕末から維新の雰囲気が生き生きと描かれている。

渡米した時の同船者が薩摩藩の伊東祐亨、24歳。大きな体格で大たぶさに結い、いつも浴衣がけで酒ばかり飲んでいる。高橋は、バーに酒を買いに行って駄賃代わりに飲んでいたが、いつも人の酒ではうまくないと小遣いとして渡されていた20ドル金貨、果ては酒を飲まない鈴木の金貨まで飲んでしまったという。

高橋は幕府が倒れたと聞いて、何とか奴隷契約を解除して貰い、明治元年12月に帰国、森有礼の書生になっている。森は23歳、外国官権判事。大勢の食客を抱えていて、森だけ別のおかずを作ると「そんな区別をしてはいかぬ。書生たちと一緒にせよ」と、みんなと同じものを食べる。森から英語を教わっているうちに2年12月、大学南校(東大の前身)が設立され、森が「もう俺が教えなくてもよくなった。学校へ入れ」

高橋は「是清翁との対話」で「自分が今まで会った人物の中で一番の立派な人は森有礼さんだ。あの人がもっと生きてゐられたら、日本の現代の教育の弊害はなくなってゐたらう」(昭和9年7月)と語っている。

▽大学南校に入ると

２か月後には「教官三等手伝い」

放蕩無頼から教員、役人生活へ

金が入ると茶屋遊びを覚え、馴染みの芸者も出来た。学校も欠勤がちになり、明治3年秋、浅草の芝居見物に行って芸者の長襦袢姿で酒を飲んでいるところを、外人教師に見つかった。

辞表を出して芸者屋に居候、箱屋として浜町河岸を流しているうちに、17歳の高橋も「男一匹、こんなことではいかん」。無頼の生活を断ち切る決心したところへ、友人から佐賀・唐津藩の英語教師を世話され、唐津に赴任した。

●ペルーの銀山開発に日本代表として参加(明治22年)

れは決して人を害ねるものでありません。男は名を惜しむことが第一です。義のためや恥をかいたら、死なねばならぬことがあるかも知れぬ。その万一のために授けるのです」と、切腹の作法まで教えたという。

ヘボン(James Curtis Hepburn)

1815～1911 米宣教師。安政6年来日し、慶応3年日本で最初の和英辞典「和英語林集成」を完成し「ヘボン式ローマ字」の基に。明治22年明治学院初代総理。

伊東　祐亨(いとう・ゆうこう)

天保14(1843)～大正3(1914) 薩摩藩出身。海軍大将・元帥。日清戦争で連合艦隊長官。戦後、軍令部長となり、「陸軍の山県」と並ぶ海軍の重鎮に

日清戦争のエピソード

清国北洋艦隊提督丁汝昌は、威海衛に追い詰められ人命保護を条件に伊東連合艦隊長官に降伏を申し入れた。伊東が慰労の葡萄酒を贈ると、丁は「両国有事の際私受しがたし」と葡萄酒を返上、服毒自殺した。清国商船が丁の棺を乗せ出航する時、旗艦松島は将官の礼を以て弔砲を放ち、各軍艦は「登舷令」、全乗組員が上甲板に整列し見送った。

丁汝昌(てい・じょしょう)

？～1895 清国北洋艦隊提督。日清戦争で黄海海戦に敗れ、威海衛に拠ったが、日本艦隊に封鎖され、降伏して自決

森　有礼(もり・ありのり)

弘化4(1847)～明治22(1889) 薩摩藩出身。慶応1年藩命でロンドン大に留学、3年渡米。駐清公使、外務大輔、駐英公使。明治18年伊藤内閣文相となり学制改革を行い、近代学校制度を定めた。憲法発布の朝、国粋主義者に暗殺される

▽完全に掘り尽くした インチキ話

大塚窪町の土地・家屋を処分し 会社を整理

高橋の生涯には筋金が一本通っていた

友人が心配して、県知事など役人の話を持ってきても断った。「これまで私が役人をやったのは衣食のためではない。いつでも役人を辞めても差し支えないだけの用意があったからだ。だから上司が間違っていると思った時は、敢然これと議論して憚るところがなかった。ところが今は衣食のために苦労せねばならぬ身になっている。到底、以前のように精神的に国家に尽くすことは出来ない。自分の意に合わないことでも、上司の命令であれば聞くことを余儀なくされぬとも限らない。こうした境遇で官途につくことはよろしくないと考えた」

日銀入りのキッカケ

25年4月、日銀総裁川田小一郎に呼ばれた。山陽鉄道社長中上川彦次郎が三井に入ることになり後任者の推薦を依頼してきたが、「その後釜に座ってはどうか」。高橋は断った。「私はこれまで鉄道には何の経験も知識もありません。従って、私は社長として過ちなくやって行く信念がありません。もし万一、職を辱めるようなことかあっては、推薦者である貴方にご迷惑をかけるだけでなく、私自身も信念なきにその地位に座ることは良心が許しません。どうせ実業界に出して下さるなら、丁稚小僧から出して下さい」

6月1日、新築中の日銀本店建築事務所主任に雇われた。技術部監督は設計者の辰野金吾博士。高橋が唐津の英語学校教師をしていた時の教え子で、川田が「それでもいいのか」と確かめても「喜んで働きます」と、一向こだわらなかった。

翌年には日銀支配役西部支店長、横浜正金銀行副総裁を経て明治32年、44歳の時に日銀副総裁。

●昭和の子供は「敵中横断三百里」に夢中になったが、明治の子供を熱狂させた福島安正中佐の「シベリア単騎横断」

川田　小一郎（かわだ・こいちろう）

天保7（1836）～明治29（1896）　土佐藩出身。藩会計方として殖産事業に当たり、維新後、岩崎弥太郎の九十九（つくも）商会に入社、三菱の鉱山・炭鉱事業を統括した。明治22年日銀第3代総裁に就任

中上川　彦次郎（なかみがわ・ひこじろう）

安政1（1854）～明治34（1901）　中津藩出身。母は福沢諭吉の姉。時事新報社長、山陽鉄道社長を経て明治24年三井銀行理事となり、三井財閥の改革を行なう。昭和37年参院全国区に自民党からトップ当選した藤原あきは三女

辰野　金吾（たつの・きんご）

安政1（1854）～大正8（1919）　唐津藩出身。明治建築界の指導者。コンドルに学び、英国留学後、明治31年東大工科大学長。主な建築に日銀本店（明治29年）東京駅（大正3年）。フランス文学者隆は長男

高橋を感激させた川田

高橋の日銀入りに、大蔵次官田尻稲次郎が「あんな相場をやるような山師を日銀に入れるのは宜しくない」と、非難していることが耳に入った。病気療養中の川田はすぐ飛んで行って、田尻が「ほんの世間の噂に聞いたことを言ったまでだ」と弁解すると、「貴方は大蔵次官という責任ある地位にあられる。世間の噂だといって、人の身上に関し軽軽しく口にせられることは宜しくない。今後は再び、ああいうことを言われないようにして頂きたい」と厳しくたしなめた。

田尻　稲次郎（たじり・いなじろう）

嘉永3（1850）～大正12（1923）　薩摩藩出身。エール大に学び大蔵省主税局長、次官を歴任し、明治34年会計検査院長。大正7年東京市長

世界のトップニュース

駐独武官の福島は帰国命令を受けると、明治25年2月11日、愛馬「凱旋」にまたがりベルリンを出発。ポーランド、露都ペテルブルクを経てウラル山脈を越え、外蒙古、シベリア通ってウラジオに到着したのが、1年4か月後の26年6月12日。行程実に1万4千キロ。

朝日新聞は、名文記者西村天囚をウラジオに派遣、「読者請ふ刮目して待たれよ」との社告を出し、「単騎遠征録」を120回にわたり連載した。子供たちは「日本の英雄、それは福島中佐」と口を揃えて言ったという。

福島もまた貧しい中、刻苦勉励

下級武士の家に生まれ、2歳の時に母が病死。貧しいため、ろくな教育も受けられず、ひたすら射撃訓練に励んだ。13歳の時には200発中命中193発、誰も敵わなかったという。明治3年上京、大学南校に入って語学を学んだが、布団を買う金がない。夜は寝ずに声を出して読書、昼間太陽の下で睡眠をとった。

司法省を経て陸軍省に入り地学を研究。西南戦争には文官として従軍、戦後中尉になるという軍人としては変則的なスタートだった。

日本の情報将校のはしり

シベリア単騎横断は、シベリア鉄道(明治24年5月着工)がどんな地形になっているのか、その建設状況、ロシア国内の実情を探るためだった。

明治12年、上海、北京などを5か月間にわたって旅行、参謀本部はその報告を基に「隣邦兵備略」64巻に纏めたが、清国の地理、交通状況、風土、民族、皇帝の親衛隊の装備、訓練、士気から上級幹部の経歴、能力、性格、家庭状況など、詳細に分析したものだった。

15年に北京公使館付武官となり、清国軍隊の現状調査をし「清国兵制類集」65巻に纏めた。20年に駐独公使館付武官になるとヨーロッパ15か国を回っているが英語、フランス語、ドイツ語、中国語に精通、ロシア語も少し話せた。

「敵中横断三百里」

山中峯太郎の軍事冒険小説。日露戦争で奉天会戦前、建川美次中尉が騎兵斥候建川挺身隊を率いてロシア軍の背後を横断、敵情を探って来た話。

山中　峯太郎(やまなか・みねたろう)
明治18(1885)～昭和41(1966)大阪生まれ。陸士卒。大正3年孫文の革命に参加、軍籍を離れ冒険小説家となり、「敵中横断三百里」「亜細亜の曙」で人気を博す

建川　美次(たてかわ・よしつぐ)
明治13(1880)～昭和20(1945)新潟県生まれ。陸軍中将。満州事変で参謀本部作戦部長として作戦指導に当たり、第10、第4師団長を経て昭和15年駐ソ大使

福島　安正(ふくしま・やすまさ)
嘉永5(1852)～大正8(1919)信州松本藩出身。陸軍大将。駐清国武官を経て明治20年駐独武官。義和団事件第1次派遣隊司令官として活躍し日露戦争では満州軍参謀。39年参謀次長、45年関東都督

西村　天囚(にしむら・てんしゅう)　本名　時彦(ときつね)
慶応1(1865)～大正13(1924)　鹿児島県生まれ。明治23年朝日新聞入社、26年大阪朝日主筆。福島中佐の単騎遠征録、日清戦争従軍記、義和団事件の報道など、名文記者として知られる

豊かな教養

ワルシャワの古城の石垣を見て、ロシア、ドイツの強国に挟まれ占領・分割の悲劇を繰り返すポーランドに心を痛め「ポーランド懐古」と題し歌っている。

栄枯盛衰世の習　その理は知らねども
かくまで荒るるものとしは　誰か思はん夢にだに　存亡荒廃世の習　その理を疑はん　人は一度は来てもみよ　哀れはかなきこの所

●明治の軍人は情報を重視、収集と評価・分析に心血を注いだ

▽最大の関心は シベリア鉄道と東清鉄道
　戦争になった時 どの程度増援を送れるかは
　　その輸送力にかかっていた

▽３０年４月 花田仲之助大尉が
　西本願寺の布教僧に化け シベリアに潜入

▽３２年８月には 石光真清大尉
　ハルビンで写真館を開き 情報収集に当たる

開戦前にシベリア鉄道の全貌を掴む

石光は「ハルビン一」の信用を集めるため、ドイツから最高の写真器材を東京からウラジオ経由で取り寄せた。このルートを使えば、参謀本部に情報を送っても怪しまれないと思ったのだ。ロシア軍も鉄道建設状況、鉄橋など報告書用写真撮影を依頼して来た。監視は厳重で、現像には必ずロシア兵が立ち会い、焼付け後、原板もその場で回収した。石光は、特殊な加工液で、わざとぼけた失敗写真を作り、帰ってから復元して参謀本部に送った。怪しまれないよう記念写真のようなものにまで失敗写真を作ったという。停車場、機関庫まで詳細に記入した東清鉄道予定路線図も入手出来た。

▽ウラジオ港の輸送能力 集荷量を探るためため
　３３年 武藤信義大尉が １年にわたり調査
　帰国後 日本郵船社員の肩書で オデッサへ
　　そこから送られる 兵員 物資量を調べた

▽駐露武官明石元二郎大佐は「極東露軍集中表」
　満州での ロシア軍の詳細な配備状況で
　　露軍大尉を 年間報酬５００ルーブルで買収した

児玉参謀次長は明石に極秘指令

「ペテルブルク、モスクワ、オデッサの主要都市に、外国人（非ロシア人）の情報提供者二名ずつを配置せよ。その理由は、二つの情報を比較することによって、より客観的に事実を見極めることが出来るからだ。それ故、適任者を雇う場合、お互いに他の一名が誰であるかわからないようにせよ」（37年1月12日）

石光　真清（いしみつ・まきよ）

慶応4（1868）～昭和17（1942） 熊本藩出身。陸軍少佐。明治32年語学生としてシベリアに渡り、予備役になって「菊地正三」の変名でハルビンで写真館を開く。日露戦争に第2軍管理部長として従軍。戦後、世田谷で3等郵便局長をしていたが、ロシア革命で大正6年軍の依頼で再びシベリアで諜報活動に従事、8年に帰国。4部作の遺稿集「城下の人」、「曠野の花」、「望郷の歌」、「誰のために」

「シベリアからゆきさん」の協力

シベリア鉄道建設には、大勢の日本人労務者が行っていて、騙されて売られた日本人女性もシベリア各地にいた。馬賊のお妾さんの女性も多く、石光が写真館を開くことが出来たのも、満州各地を旅行して情報収集出来たのも、「からゆきさん」、信義に厚い馬賊たちの協力だった。

武藤　信義（むとう・のぶよし）

明治1（1868）～昭和8（1933） 佐賀藩出身。陸軍大将・元帥。関東軍司令官（大正15年）、教育総監を経て昭和7年満州国建国で再び関東軍司令官兼駐満全権大使兼関東州長官に就任、現地で病没

明石　元二郎（あかし・もとじろう）

元治1（1864）～大正8（1919） 福岡藩出身。陸軍大将。明治27年ドイツに留学、35年8月ロシア駐在武官。開戦後はストックホルムを本拠にヨーロッパ各地で諜報工作。43年韓国憲兵司令官となり、憲兵による朝鮮支配を主導。大正7年台湾総督。遺稿集に「落花流水」

昭和の陸軍に欠けていたもの

情報を比較検討し、総合的に判断する姿勢だった。第2次大戦でドイツ軍のイギリス本土上陸作戦がいつ行なわれるか、世界中が注目している時、ヨーロッ

●ロシアは日本を甘く見ていた

クロパトキン(極東軍総司令官)は豪語していた

36年5月に来日、戸山学校などを視察したが、「日本兵三人にロシア兵は一人で間に合う。我々は十三日間に四十万の軍隊を満州に集結出来るし、その用意もしている。来るべき戦争は戦争というよりも、軍事的散歩に過ぎない」

前月、神戸に寄港した巡洋艦アスコリッド艦長も「日本海軍は外国から艦艇を購入し、物質的装備だけは整えた。しかし、海軍軍人としての精神は到底我々には及ばない。さらに、軍艦の操縦や運用に至っては極めて幼稚である」

●明石は開戦と同時にロシアを国内から揺さ振る布石

▽皇帝独裁への不満 暴動 暗殺など 革命の火種
　ポーランド フィンランドでも 民族独立運動
　「ちょっと突っつけば、内部から崩壊する」

▽ストックホルムを本拠に
　ロンドン パリ ベルリンと 駆け回る

▽開戦間もない２月２２日
　シリヤクス(フィンランド革命党党首)が 訪ねて来た

▽明石は 運動資金の提供を約束 シリヤクスも
　日本の軍人として 表面に出られない
　明石に代わり 謀略工作の表の顔に

▽パリで ３７年１０月１日から５日間
　シリヤクスを議長に 帝政ロシア打倒合同会議

▽ポーランドで始まったゼネストは ロシア本国へ
　３８年１月２２日に「血の日曜日事件」
　各地でストが頻発 ６月２７日には
　オデッサで「戦艦ポチョムキンの反乱」

▽日露講和条約調印(38年9月5日) 翌日の夜
　フィンランド沖で 貨物船が座礁
　船底から 多数の小銃 弾丸が見つかり
　新聞は「怪船現わる」と書き立てた

▽明石が 革命派に渡すため スイスで
　購入した 小銃２万４千挺 弾丸４百万発

●長岡外史参謀次長は「明石には百万円送金した」

▽今の金で百億円 多くの「明石神話」を生む

パ駐在陸軍武官からは的確な報告が来ていた。ドイツ軍に上陸用舟艇の準備が出来ていないこと、航空戦もイギリス空軍が優位に立っている、など。

しかし参謀本部情報部長は、ドイツに不利な情報はよくないと手元で握り潰してしまった。「英米の宣伝に惑わされている」と叱責電報が来る始末。

クロパトキン(Aleksey Kuropatkin)
1848～1925 ロシア陸軍大将。陸相を経て極東軍総司令官として日露戦争を指導したが、奉天会戦に敗れ解任された

「血の日曜日事件事件」

首都ペテルブルクで「生活苦から救え、憲法を作れ、戦争を止めろ」、皇帝への誓願デモが10万人に膨れ上がり王宮へ向かって行進を始めた。コサック騎兵が制止しようとしてサーベルを抜いて襲いかかり、一斉射撃、広場を血で染める大惨事になった。

政府発表は死者百人だが、ロイターは死者2千、負傷者5千。作家ゴーリキーは「ロシアにはもう皇帝はいない。自由の闘いを始める時が来た」と演説、各地でストが頻発するように。

「戦艦ポチョムキンの反乱」

水兵が食事の改善を要求し、艦長らを射殺、マストに赤旗を立て、ロシア革命の発端となった事件。

明石は反乱水兵のリーダーに4万円の闘争資金を与えており、影で糸を引いていたのは確実といわれる。

長岡　外史(ながおか・がいし)
安政5(1858)～昭和8(1933)　長州藩出身。陸軍中将。日露戦争で児玉の後を受け参謀次長。第13師団長(新潟県高田)の時、部下将校にオーストリアのレルヒ少佐からスキーを学ばせ、民間にも普及

▽ロシアも 明石に神経を尖らせ 密偵がぴったり
　現実に 各地で 暴動が起これば
　　極東派遣予定の精鋭部隊も 動かせない
▽ロシアにとって 戦争より 秩序崩壊が問題に
　日本より はるかに 余力を残しながら
　　講和に踏み切ったのは 革命の影に怯えた
▽明石が 革命派の武器援助に４５万円要請した時
　外務省は「内政干渉」の非難を恐れ 反対した
▽山県有朋参謀総長が 押し切って承認したのは
　日本の国力が 尽きかけている時
　　「明石工作」に 大きな期待を かけたから

金銭に几帳面な明石

何に使うか、その裁量は全て明石に任されていたが、しっかり使途を金銭出納帳に書き残し、領収書がなかったのは列車内のトイレで腹巻ごと落とした数百ルーブルだけ。使わなかった27万円は、帰国後、全額陸軍省に返却している。

●情報の失敗もあった
▽要塞旅順の正体が 掴めないまま
　無謀な正面攻撃を繰り返し 多大の犠牲

外交暗号が盗まれていた

栗野慎一郎ロシア公使は2月5日夜、引き揚げの指示と「これから4通の重要電報が行く」との予告電報を受け取った。その夜は、皇帝招待の観劇会があり、電報は「極秘かつ公使自身の取り扱い」を指示している。

栗野はやがて入電した国交断絶通告文を、暗号のままポケットに入れ帝室劇場に出かけると、何となくザワついている。皇帝の謁見も2、3分で終わるのに、この夜はいつになく丁寧で長い別れを惜しむよう。フランス公使も「いよいよお仕舞ですな」と声をかけて来る。とっさに、ウイッテ前蔵相の言葉を思い出した。

意見を聞こうと訪ねたところ「自分は今皇帝の不興を買っている。たとえ、個人としてでも政治的意見を言うと誤解される」「本国政府には暗号電信で送るから外に洩れる気遣いはない」ウィッテは苦笑いして「貴国の暗号は貴国

ちょっと変わった軍人

1200石取りの家に生まれた明石は、幼い時に父を亡くし学費のかからない幼年学校に入った。あだ名が「鼻っ垂れ」。成人しても余り変わらなかったと見え、駐仏武官の時の手紙に「近頃、わしも歯を磨くようになった。昔に比べると随分文明紳士になった」と書いている。

士官学校の成績で抜群なのが語学、数学、漢学。悪かったのが図学で絵はうまいのだが、手垢、鼻汁で画用紙が汚れ、本人が熱中するほど、紙が真っ黒に。服装も全く無頓着。ポケットには穴が開き、ボタンも千切れている。

陸軍も、とても指揮官には向かないと思ったのか、陸大卒業後25年間、部隊勤務は1年半だけ。後は外国にいるか、参謀本部勤務だった。

山県　有朋（やまがた・ありとも）
天保9(1838)～大正10(1921)　長州藩出身。陸軍大将・元帥。奇兵隊軍監。維新後ヨーロッパを視察し、帰国後陸軍大輔。軍政を確立し徴兵令制定。参謀本部長、内相を歴任し明治22年、31年首相。日露戦争では参謀総長

栗野　慎一郎（くりの・しんいちろう）
嘉永4(1851)～昭和12(1937)　福岡藩出身。外務省政務局長、駐米・伊・仏公使を歴任、明治35年ロシア公使。戦後は39年フランス大使となり枢密顧問官

ウイッテ(Sergey Vitte)
1849～1915　帝政ロシア蔵相。財政改革に当たり、シベリア鉄道を推進。ポーツマス講和会議では首席全権として小村寿太郎と渡り合う。1905年、皇帝に立憲政体を承認させ首相に就任

で暗号と思っているだけだ」
その時は「まさか」という思いだったが、これは「明日6日通告予定の国交断絶の暗号が盗まれているのではないか」そう思って、公使館に戻るとすぐ外務省に問い合せたが、「絶対大丈夫」の返事だった。

▽明石大佐も おかしなことに 気付いていた
▽ヨーロッパ各地で 活動する際
参謀本部と 在外公館との連絡に
「あばずれ」をもじり 「アバズレス」の変名
▽ロシアの女スパイが 明石に
「アバズレス」と指名して 接触を求めて来た

真相がはっきりしたのは…

日本のフランス公使館に、ロシア諜報機関の男が盗んだ暗号書を売り込みに来た。5千フランの高額だったが、本野一郎公使は、入手経路を明かすことを条件に応じた。
それによると、日本のオランダ公使が単身赴任なのに目をつけ、美人の女スパイを女中として住み込ませた。彼女は、暗号書が公使専用デスクの抽き出しにしまってあることを掴むと、合鍵を作って盗み出し、写真撮影した上で元に戻していたのだ。
外務省はすぐ暗号書を切り替えたが、これも間もなくフランス警視庁の暗号マニアの警視によって解読され、フランス政府はコピーを同盟を結んでいるロシアに渡したという。

●ロシアは、日本の手の内をすっかり知った上で…
▽日本の宣戦布告は 2月10日だが
国交断絶したら 有利な態勢で
先制攻撃をかけるのが 日本の作戦だった
▽ニコライ二世は 8日朝 極東総督に
「日本から先に手を出させろ」と命令
▽8日夜 日本の駆逐艦隊が 旅順口を夜襲
戦艦2隻を擱座させると
「日本は宣戦布告しないで攻撃して来た」
盛んに 日本の「だまし討ち」を 強調した

本野 一郎（もとの・いちろう）
文久2(1862)～大正7(1918) 佐賀藩出身。フランス・リヨン大に学び外務省に入る。明治31年全権公使となり、ベルギー、フランス、ロシアに駐在。大正5年寺内内閣外相。この間明治43年から大正6年まで読売新聞社主を勤める

ロシア皇帝の命令

2月8日朝、アレクセーエフ極東総督に対し、「戦争ハ日本ヨリ開始セシメンコトヲ希望ス。日本軍、南韓及元山以南ノ東海岸ニ上陸スルモ、卿ハ、之ニ対シ何等ノ手段ヲ採ルヲ要セズ。然レドモ、若シ日本ノ艦隊ニシテ、其ノ陸軍ヲ伴フト否トヲ問ハズ、北緯三十八度ヲ超過スルコト有ラバ、卿ハ日本軍ノ砲撃ヲ待ツコト無ク之ヲ攻撃スベシ」

宣戦布告前の攻撃

日露戦争当時は、宣戦を事前に通告する慣行はまだ確立されておらず、武力行使の前に宣戦を通告すべきだとの「開戦ニ関スル条約」が締結されるのは、明治40年になってから。
ロシア自体、1808年にフィンランドに出兵してから国交断絶を通告しており、ロシアの懸命の宣伝も、国際的同調を得ることは出来なかった。

太平洋戦争でも暗号は完敗

日本の外交暗号は、日独伊三国同盟締結の直前、昭和15年9月にアメリカに解読されていた。武力に自信を持つ国は、ロシアもアメリカも、日本から先に1発撃たせようとしている。そして先制攻撃した日本が非難されたのも同じだった。
海軍暗号もアメリカは開戦1か月後の昭和17年1月、オーストラリア沖で沈没した日本潜水艦から暗号書を回

●日露戦争の情報活動は、太平洋戦争と比べて、これが同じ国かと疑いたくなるほど、見事なものだった

▽ただ 組織的というよりは 属人的
　福島 明石 石光の成功も
　個人の資質 努力に負うところが 多かった

▽イギリスと日本の違いは
　情報収集を 組織的に育てたかどうか

▽「明石神話」は いつの間にか 謀略工作が
　海外武官の仕事だと 錯覚させることになった

▽陸軍も 謀略工作のために 莫大な機密費
　平成７年２月 今村均大将の証言テープが
　　国会図書館から 公開された

今村の証言テープ

関東軍の機密費は5、6百万円（今の百億円）もあった。陸軍省の機密費も預かっていて、その利子は自由に使っていいことになっていたので、今村は「関東軍の参謀は宴会ばかりしていた。これが参謀、ひいては日本陸軍の堕落を招いた」と証言している。

▽地道な情報収集より 謀略工作に血道をあげる
　日露戦争に勝って １等国になった慢心が
　情報に鈍感で 情報を無視 軽視する陸軍を

収して解読、これが6月のミッドウェー海戦敗戦、さらには18年4月の山本五十六連合艦隊司令長官の戦死につながる。

山本　五十六（やまもと・いそろく）

明治17（1884）～昭和18（1943）新潟県長岡市生まれ。海軍大将。海軍次官を経て昭和14年連合艦隊長官。開戦劈頭、機動部隊による真珠湾攻撃を立案、実行。18年4月、前線視察中にソロモン諸島上空で戦死した。国葬、死後元帥

今村　均（いまむら・ひとし）

明治19（1886）～昭和43（1968）宮城県生まれ。陸軍大将。昭和11年関東軍参謀副長。太平洋戦争で第16軍司令官、ジャワ作戦を指揮。17年第8方面軍司令官となりガダルカナル撤退に努めた。戦後、戦犯に問われ禁固10年の刑を受けたが、28年まで部下のいるマヌス島で服役。帰国後、自宅の庭に3畳ほどの小屋を建てて籠もり、戦没者の冥福を祈った。著に「私記・一軍人六十年の哀歓」